

Amy Tan

THE HUNDRED SECRET SENSES

Translated by Mizuko Ozawa

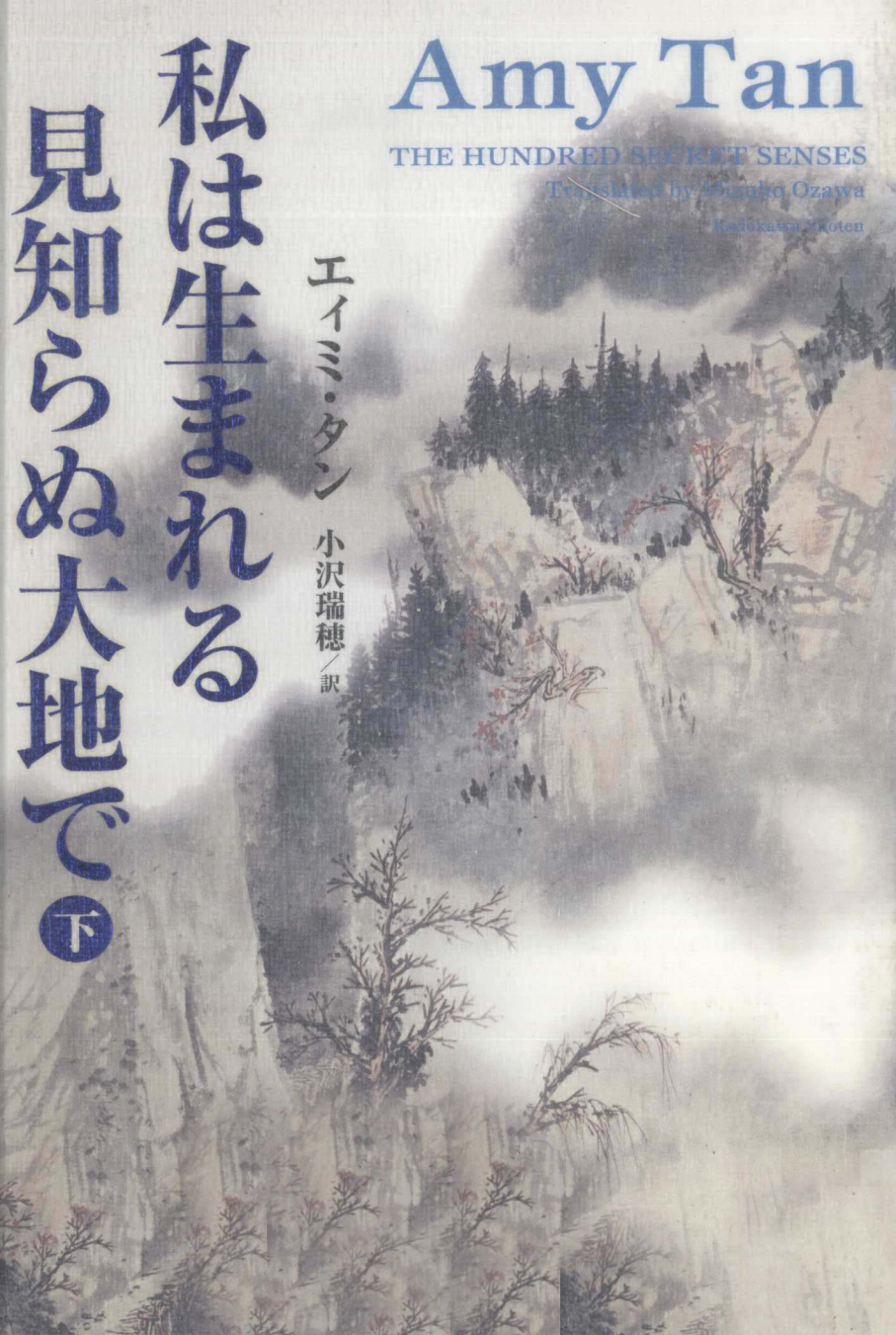
Kadokawa Shoten

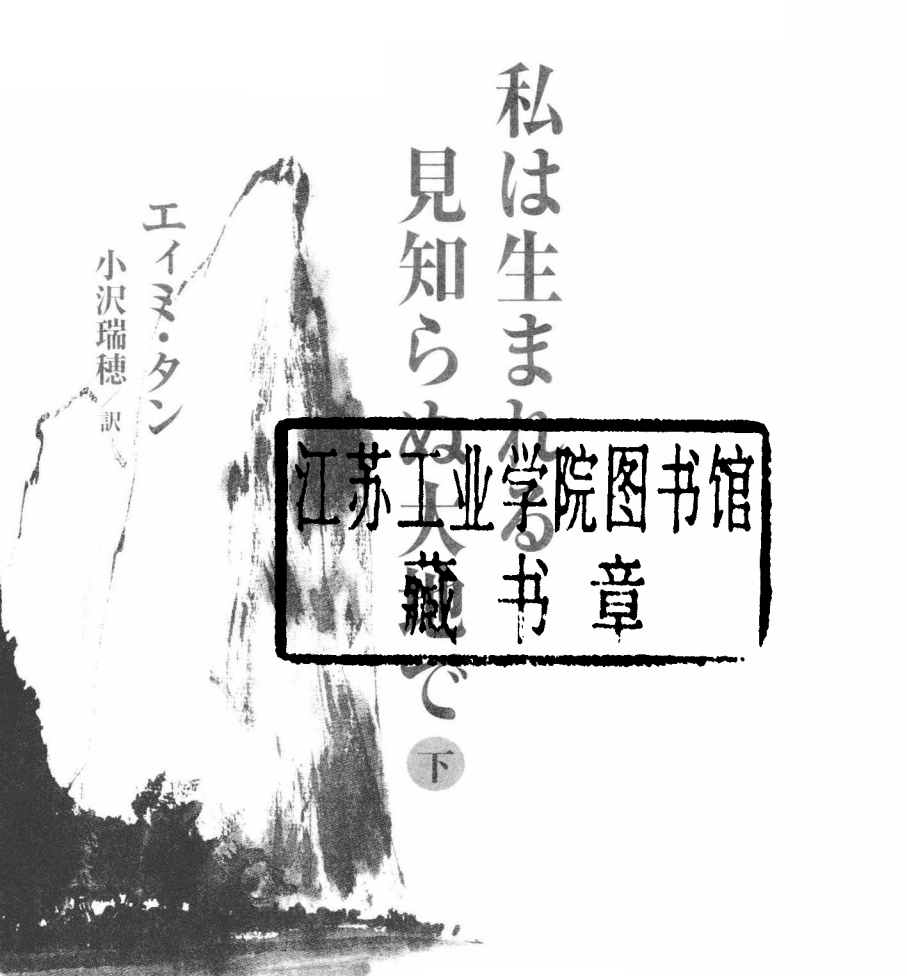
エイミ・タン

小沢瑞穂／訳

私は生まれる

見知らぬ大地で
下





エイヌ・タン

小沢瑞穂 訳

私は生まれ
見知らぬ
大地で
下

江苏工业学院图书馆
藏书章

THE HUNDRED SECRET SENSES

Translated by Mizuho Ozawa

Kadokawa Shoten

エイミ・タン (Amy Tan)

1952 年、カリフォルニア州オークランド生まれ。

フリーランスのライターをするかたわら書いた処女作『ジョイ・ラック・クラブ』が大ベストセラーに。「米文学界のシンデレラ」といわれる。

他に『キッチン・ゴッズ・ワイフ』がある。本書は第三作。

弁護士の夫と共にサンフランシスコ在住。

小沢瑞穂 (おざわ みずほ)

東京都出身。立教大学英米文学科卒。翻訳家。

主な訳書に『ジョイ・ラック・クラブ』『キッチン・ゴッズ・ワイフ』『ミュータント・メッセージ』(以上角川書店)『グラス・ダンサー』(めるくまー)『判決前夜』(新潮文庫)。

私は生まれる 見知らぬ大地で 下巻

エイミ・タン

小沢瑞穂／訳



1997年4月25日 初版発行

発行者／角川歴彦

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 00130-9-195208

TEL 営業03-3238-8521 編集03-3238-8555

印刷所／暁印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Printed in Japan

ISBN4-04-791261-1 C0397

私は生まれる 見知らぬ大地で 下巻

THE HUNDRED SECRET SENSES

by

Amy Tan

Copyright © 1995 by Amy Tan

Japanese translation rights arranged with
Amy Tan c/o Sandra Dijkstra Literary Agency
through The English Agency (Japan) Ltd.

Translated by Mizuho Ozawa

published in Japan

by

Kadokawa Shoten Publishing Co., Ltd.

私は生まれる 見知らぬ大地で 下巻 目次

第三部（承前）

十三章	乙女の願い	9
十四章	ハロー・グッバイ	23
十五章	七日め	41
十六章	ビッグ・マアのポートレート	65
十七章	洪水のない年	91
十八章	六羽の春鶏	105
十九章	アーチ道	135

二十章 石像の谷間

165

二十一章 空が燃えたとき

195

二十二章 光と闇のあわい

209

第四部

二十三章 葬式

225

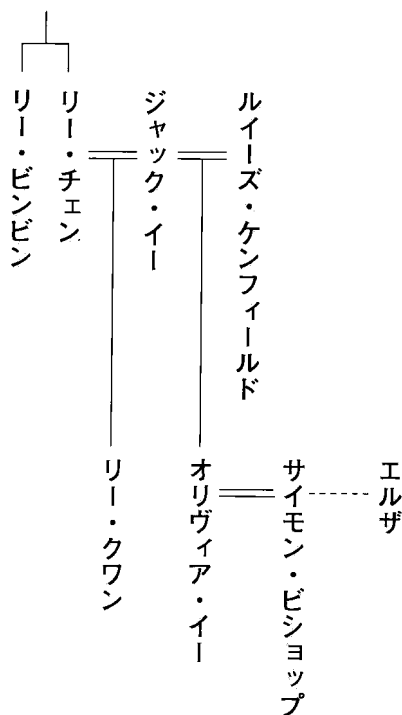
二十四章 終わりのない歌

233

訳者あとがき

237

〈主な登場人物〉



◆前世◆

ヌヌムー……客家族の片目の少女、前世のクワン
 バナー・ネリー……アメリカ人、ヌヌムーの友人
 ツェン……片耳の行商人
 ケープ……アメリカ人将校、バナーの恋人
 イーパン・ジョンソン……アメリカ人と中国人のハーフ、ケープ将軍の通訳
 ラオル……バナーの世話をする老人

第三部

(承前)

十三章 乙女の願い

中国での最初の朝、桂林ケイリンのホテルの暗い部屋で目を覚ますと、ベッドにのしかかる人影がひとつ。殺し屋のように私をじっと見つめている。悲鳴を上げかけたときクワンの中国語がきこえる。「横むきに寝るなんて——だから姿勢が悪いんだわ。これからは仰向けあおむけに寝ること。それと体操もすること」

彼女はバチンと明かりをつけ、実演してみせる。六〇年代の体操教師みたいに腰に手を当ててからだをひねっている。おせっかいな忠告をするために、私が起きるまでのぐらい長くベッドの横に立っていたんだらう。彼女のベッドはもうきちんと作られている。私は腕時計を見て、不機嫌な声を出す。「クワン、まだ朝の五時よ」

「ここは中国。みんな起きてる。寝ているのはあんただけ」

「もう起きたわよ」

中国に着いてからまだ八時間もたたないのに、もう彼女に人生を支配されつつある。ここは彼女

の領土、彼女のルールに従って彼女の言葉をしゃべらなければならないのだ。彼女は中国人の天国にいる。

彼女は私の毛布をぱつと取って笑う。「リビア、早く起きて。私の村に行つてみんなをびっくりさせたんだから。ビッグ・マーが口をあんぐりあけるところを見たい、驚く声をききたい——ちょっと、あんたを追い出したと思つてたのに、なぜ帰つてきたのって」

クワンは窓を押し開ける。私たちが泊まつている桂林シェラトンは漓江に面している。外はまだ暗い。うるさいパチンコ屋のようなチリンチリンという音がする。窓に行つて見下ろすと、三輪自転車に乗つた物売りが互いにベルを鳴らして挨拶しながら穀物や蕪や西瓜の袋を市場に運んでいる。大通りは自転車や車、労働者や小学生の影であふれている——みんな真つ昼間のように警笛を鳴らしたり、しゃべったり叫んだり笑ったり。一台の自転車のハンドルには巨大な豚の頭が四つ、死の笑いを浮かべた白い鼻の穴に縄を通してくりつけられている。

「見てごらん」クワンは暗い裸電球に照らされた屋台の群れを指さす。「あそこで朝ごはんが買える、安くておいしいのが。ひとり九ドルのホテルの朝食よりずっといい——九ドルも出してドーナツにオレンジ・ジュースにベーコンなんて、だれが食べたい?」

屋台の食べ物に口にするなというガイドブックの警告を思い出す。「九ドルならそんなに高くないわ」

「ウワ! そんな考えはもう捨てなきゃ。ここは中国なのよ。九ドルは大金、一週間分の給料なんだから」

「そうだけど、安い食べ物食あたりするかもしれない」

クワンは身ぶりで通りを示す。「見てよ。あそこにいる人たち、食あたりしてると思う？ 中国の食べ物の写真を撮りたいなら、本物の中国料理を食べなくちゃ。香りは舌に広がって胃にしみていく。胃は本当の感情があるところ。写真には、その本当の感情がにじみ出てくる。だから写真を見た人がみんなそれを味わってみたいくなる」

クワンの言う通りだ。寄生虫の一匹や二匹おなかにかかえて帰ってもいいじゃないか？ 私は暖かい上着をはおり廊下を歩いてサイモンの部屋のドアをたたく。彼はもう着替えをすませていて、すぐに現れる。「眠れなかったんだよ」彼は言う。

五分後、私たち三人は歩道にいる。十幾つの屋台をぶらぶら見て歩く。携帯式のプロパンガスを備えた屋台もあれば、間に合わせのグリルを持っているところもある。みんな屋台の前に半円にしゃがんでヌードルやギョウザを食べている。私は疲れと興奮でからだが震えている。クワンはパンケーキのようなものを熱したドラム缶の腹にたたきつけている主人を選ぶ。「三つちょうだい」彼女は中国語で言う。主人は黒ずんだ指で焼き上がったパンケーキをはがし、サイモンと私はあちちと叫びながら熱いパンケーキをサーカスのジャグラーのように上下させる。

「いくら？」クワンは小銭入れを開く。

「六元」^{ホアン}主人が言う。

「ドルちょっと、と私は換算する——なんて安い。でもクワンにとっては、ひどいぶったくり。「ウワ！」彼女はもうひとりの客を指さす。「あの人には、たった五十分^{フエン}で売ったじゃないの」

「そりゃそうさ！ 彼はこの地元の労働者だからな。あんたたちは観光客だろう」

「なに言ってるのよ！ 私もここの出なんだからね」

「あんたが？」主人は鼻をならし、クワンを品定めする。「どこだって？」

「チャンミエン」

彼の眉が疑わしげにびくりと動く。「ほんとかい！ チャンミエンのだれを知ってるんだい？」

クワンは幾つか名前を並べたてる。

主人は腿をびしやりとたく。「ウー・ザーミン？ ウー・ザーミンを知ってるって？」

「もちろん。子供のとき通りの向かいに住んでたんだから。彼は元気？ もう三十年も会ってないわ」

「彼の娘はうちの息子と結婚したよ」

「まさか！」

男は笑う。「ほんとうさ。もう二年になる。女房とおふくろはこの結婚に反対だった——相手がチャンミエンの娘というだけだね。あいつらは古い因習にとらわれてる、チャンミエンが呪われた村だといまだに信じてるんだ。わしはもう迷信なんか信じないがね。去年の春に赤ん坊が生まれたよ、女の子だが、わしは気にしてない」

「ウー・ザーミンがおじいちゃんになったなんて信じられない。彼はどうしてる？」

「奥さんをなくした、二十年前になるかな。反文革思想で牛小屋に送られたときだよ。連中は彼の両手をつぶしたが、心までつぶせなかった。ずっとあとで後妻をもらったよ、ヤン・リンファン

だ」

「まさか！ 彼女は私の級友の妹だったのよ。ああ信じられない！ ふっくらした女の子だった、まだおぼえているわ」

「もうふっくらしてないよ。顔が革みたいに頑丈な脚板皮（訳注 足の裏の皮のこと）になっちゃった、いろんな苦労をしたもんでね」

クワンと主人の噂話（うわさばなし）をよそに、サイモンと私は朝の冷気に湯気をたてているパンケーキを食べる。イタリヤの平らなパンとエシャロット入りオムレツを混ぜたような味。食べ終わるころにはクワンと主人は親友のようになり、彼女は彼の家族や知り合いに挨拶すると約束し、彼は安い運転手を見つける方法を教えてやっている。

「それじゃ、おにいさん」クワンは言う。「幾ら払えばいい？」

「六元」

「ウワ！ まだ六元？ 高い、高い。二元は出すけどそれ以上はだめ」

「じゃ、三元にしてくれよ」

クワンはぶつぶつ言いながらも手をうち、みんなでそこを立ち去る。半ブロック離れたところで私はサイモンにささやく。「あの人、チャンミエンは呪われた村だと言ってたわ」

クワンに聞かれてしまう。「チッ！ それはただの噂、もう百年も前のこと。チャンミエンに住むと不幸になるなんて信じてるのは愚か者だけよ」

私はサイモンに通訳してから彼女にきく。「不幸ってどんな？」

「知りたくないでしょう、そんなこと」

話してと言いかけたとき、サイモンが私の最初のシャッター・チャンスを指さす——ザボン、乾燥豆、カシアのお茶、唐芥子とうがらしが入った籐とうがらの籠かごがぎっしり並んだ青空市場。私はニコンでせわしく撮影し、サイモンはメモを取る。

「朝食の屋台の鼻につく煙が朝の霧と混じり合っていた」彼は声に出して読み上げる。「ヘイ、オリヴィア、こっちの角度から一枚どうか？ 亀を撮ってくれ、すてきな被写体だ」

私は息を吸い込み、先祖がだれだろうと吸っていたはずの空気で肺を満たす。昨夜は遅く着いたので、有名なぎざぎざの峰や石灰岩の洞窟など「この地上でもっとも美しい場所」とガイドブックに記されている桂林の風景はまだ見ていない。誇大広告はほとんどあてにならないから、共產主義の人々のもっと単調なモノクロの世界にレンズを向けようと思っている。

どっちに行こうと通りは派手な色の服を着た地元民たちやジョギングスーツの西欧人であふれている。フォーティナイナーズがスーパーボウルで優勝した直後のサンフランシスコのような人込み。いたるところに自由市場経済のにぎわいがある。小間物を物々交換する売り子、宝くじや株券の呼び売り商人。Tシャツ、腕時計、偽のデザインナー・ロゴ入り財布。観光客相手のみやげもの売り——毛沢東ボタン、十八羅漢を彫りつけた胡桃くるみ、プラスチックの仏像——チベット系のほっそり型と丸々としたでぶ型。中国が伝統の文化を最悪の資本主義に売り渡したかのように、使い捨ての商品や量産品が並んでいる。そんなものもうだれも買いたいと思わないのに。

サイモンが私に近づいてくる。「すごいけど悲しくなる光景だな」やおら彼はつけ加える。「でも